文化

▼森口奈良吉と武男
当時、春日神社（現、春日大社）の禰宜（ねぎ）であった森口奈良吉の日記に「〔昭和五・一九三〇年〕八・一六、売太（めた）神社に於て阿礼（あれ）祭を執行。斎主として祝詞奏上。当日の出席者は巌谷小波（いわやさざなみ）、岸辺福雄、久留島武彦……」とある。
一方、森口武男は、「〔昭和〕二十七年であったと思う。ぼくは称名寺〔伝香寺か？〕に下宿されている童話を語る久留島武彦さんを呼んで生徒に話をしてもらった」と書いている（随筆「続々綴り方『坊っちゃん』」）。武男は、奈良吉の長男で、県立高校の教員。ここに共通して出てくるのは、以下に述べる久留島武彦という人である。
▼「おはなしのおじさん」
また、森口武男は別のところでこんなふうに記す。「戦争がすむと、奈良にも文化の催しが一せいに咲いた。そんなとき、久留島武彦さんが来られた。翌朝、泊まっておられるお寺へひとりでたずねて行った」。森口が「赤い鳥」のことをどう思うかとたずねると、久留島は「あれは西洋童話で、わたしの方は日本童話だ」と、つっぱねるような調子で答えたという。「桃太郎」のことを訊（き）くと、あっさり「わからん、きみは知っているのか」と、にべもない。
小学生のころ、森口は父が姉たちのためにとっていた鈴木三重吉の『赤い鳥』を読んでいた。柳田国男の『桃太郎の誕生』は、森口が師事した折口信夫の、そのまた先生の著作。「寺の門を出てから歩きながら考えた。急にせつなくなってひきかえそうと思った。ひっかえしていたら、ぼくは〈おじさん〉と言って久留島さんの胸にとびついていたのかもしれない」（「あかいとり―あんでるせん―あくたがわ（童話のこと）」、『まほろば』二〇号、奈良県国語文化会、一九七七年）。
森口は、「おとぎ話などを語って、津々浦々をまわられる久留島さんを、ぼくら村の子供は、小学校に来るそんなおじさんを、首を長くして待っていた」とも言っている。久留島の「年譜」には、「大正八（一九一九）年、以後〔童話を口演して〕全国各地を行脚」とある。

久留島武彦

全国で童話読み聞かせ

おはなしのおじさん
―久留島武彦と奈良

「阿礼祭」の新聞記事（大阪毎日新聞、昭和5年〈1930〉8月17日付）

▼久留島武彦のこと
久留島武彦（一八七四～一九六〇年）は、大分県玖珠（くす）郡森町（現、玖珠町）に生まれている。大分中学三年在学中、英語教師ウェンライト（宣教師）に従い関西学院普通学部に転じ、翌年、師からメソジストの洗礼を受けている。
久留島はその後、教会の日曜学校を主宰し、子どもたちと接する機会となった。おそらくそのようなことも後年、自ら幼稚園を創設したり、また「口演童話家」と呼ばれ、国じゅうをめぐって子どもたちに童話を語り聞かせる素地になったと思われる。
▼『少年世界』
久留島武彦（筆名、巌谷小波）が博文館によって創刊されるのは、明治二十八（一八九五）年だが、久留島は日清戦争に従軍中から投稿を続け、復員後も「カチカチ山の紀元節」（筆名、尾上新兵衛、一八九七年）などの話を載せている。『少年世界』の終刊は、昭和八（一九三三）年というから、実に四十年近くも続いたことになる。
また、森口武男だが、「その頃〔大正末期から昭和にかけて〕ぼくは博文館発行の『少年世界』という雑誌を読んでいた」ともいう（「思い出」―幼年・少年、一九八九年）。
▼阿礼さんの祭
大正十五（一九二六）年、「奈良県童話連盟」の創立発会式が奈良県公会堂で行われる。巌谷、久留島らを顧問に、理事の一人に仲川明（元県立図書館長、一八八九～一九七一年）の名前が見える。久留島は、この日「文覚上人と鯨ともじらの話」と題して講演をしている。
さて、冒頭に触れた第一回の「阿礼祭」。新聞の切り抜きが森口奈良吉のスクラップ帳に残っている。
「県童話連盟主催の阿礼祭は十六日午前十一時から添上郡平和村大字稗田〔現、大和郡山市〕の売太神社で森口春日神社禰宜斎主となり執行、巌谷小波、久留島武彦、岸辺福雄氏をはじめ全国各地の重〔主〕なる童話家、奈良県童話連盟会員ら百余名同村小学校児童氏子らも参列……正午から境内で同村女子青年団の盆踊りあり……」（「大阪毎日」一九三〇・八・一七）。
「〈鳩のお使ひ〉平和村の平和小学校の平和のお使ひの鳩を放つ……午後二時から当校で阿礼祭記念講演会を開き小波先生、久留島先生その他吉田大和丞の浪花節あり……」（「大阪朝日」一九三〇・八・一七）。
『古事記』の口誦（こうしょう）者とされる稗田阿礼を祭神とする売太神社を「童話のおまつり」の会場に、と強く望んだのは、他でもない久留島武彦そのひとだったという。
もう一つ、別の日の新聞から引いておこう。
「久留島先生は奈良に住んでいられて、ことし七十五才になられるのに、たいへんお元気で、全国をまわって皆さんのために童話の講演をしておられます。……日本の茶道をはじめた珠光さんという坊さんの像を……このほど称名寺へ寄進〔されました〕」（「毎日小学生新聞」一九四九・五・一四）。
茶祖とされる村田珠光像の制作者は、奈良在住の吉川政治。久留島は、東京空襲で自宅を失った後、一時を称名寺に仮寓。後に同じ奈良市の伝香寺に住まいし、いさかわ幼稚園の開園に尽力している。

【本稿は、勢家肇の編になる『久留島武彦・年譜』（大分県玖珠町「わらべの館久留島記念室」刊、一九八六年）から多くのところを参照させていただいた】。

（にしむら・ひろみ＝詩人、奈良民俗文化研究所研究員）

＝次回は7月3日付＝